比頑童之訓見於尚書、可見三代已有此風、後有彌子瑕君、龍陽君、以及漢之籍孺閎孺鄧通韓嫣董賢之徒、至於傅脂粉以爲媚姿、漢惠帝時、黃門侍中、皆傅脂粉、冲帝時有飛章告、李固胡粉飾貌、搔頭弄武后、又薦其兄易之傅粉施朱、俱承辟陽之寵、魏曹子建、亦好傅粉、晉何晏動靜自喜、粉白不去手、唐張昌宗得幸於後唐莊宗嘗自傅粉、與伶人戲、此皆傅粉故事、史臣之贊曰、柔曼之傾國、非獨女德、蓋亦有男色焉、癸辛雜識謂東都盛時、有以此圖衣食者、政和中、立法告捕、男子爲娼者杖一百、當錢五十貫、南渡後、吳俗尤盛、皆傅脂粉、盛粧飾善針、指呼謂亦如婦人、其爲首者號師巫行頭、凡官府有不男之訟、則呼使驗之、敗壞風俗莫此爲甚云、按此風相習、歷代皆所不免、然如宋時之傅脂粉、幷有師巫行頭之類、則罕矣、

〔享保集成絲綸錄四十六〕承應二巳年五月

一頃日町中ニ而衆道之出入有之候、跡々ゟ堅御法度候間、衆道之儀申かけ候もの於有之は、申懸候者迄急度曲事に可申付候、若左樣之不作法之者候はゞ、町中之者隨分異見申、承引不申候はば、早々御番所江可申上事、○中略

五月

〔岩津々志〕岩つゝじ叙

うましおとめをよろこぶは、女神男神の神代より、人の心のまさに玄るべきことはりなるを、うましを男をしも、女ならでさるすける物おもひの花に醉るは、あやしくことなるに似たるわざながら、その妹脊の山は、佛のいましめさせ給へる所なれば、さすがに岩木にしあらぬ心のやるかたにて、法の師のわけ入初にし道なるを、つくばねの峯の玄たに流れ落ては、みなの川の淵となれるものゝごとく、末の世にはかへりて女男の情よりも、猶そこひなきごとくなりて、上達部うへ人などはさらにもいはず、たけきものゝふの心をもなやまし、爪木をこる山賤もなを此若木の陰に立よらずといふことなくぞなりにたる、玄かれど、是をやまとうたによみ出たることは